

# 地球第十三卷第二號

昭和五年二月一日

## 戰爭の地理學的考察 (六)

小川 琢 治

### 一六

土地の大形即ち地勢及び細形即ち地形の戰爭に及ぼす影響は多種多様にして、詳細に涉つて之を論究するに暇なきも、試みに關東地方の北方に接續する奥羽地方への遷移地區たる常毛岩磐四國の交界地に就いて尙ほ少しく考察を續けることにする。

前稿の末に略論した所により上野即ち利根川上流地方とその西及び西北に接續する信濃の東部及び東北部と越後の中部及び北部との交通に關係する戰略地理學上の意義は略ぼ明かとなつた。今茲にはその東に位する大小の交通線に就いて更に一考せんとするのである。

此等の交通線を東から順次歴舉すれば

(一) 太平洋岸に沿ふて北進する濱街道線

(二) 久慈川に沿ふて阿武隈高原と八溝山塊との間の溪谷を北進して棚倉に達する久慈川幹線及びその東の黒川支線、即ち仙道線

(三) 鬼怒川の東支流小貝川及び那珂川の上流に沿ふて筑波入溝兩山塊の西麓を北進する小貝那珂川線

(四) 鬼怒川線(略ぼ今の東北本線の鐵道線路に一致す)

(五) 日光高原兩火山の間を北進して山王峠を越える黒川、男鹿川線

の數線は何れも常陸下野兩國から北走して磐城岩代兩國に通じ、更にその西方に

(六) 上野國から利根川の溪谷に沿ひ北進してその右支尾瀬沼を経て阿賀野川の上流檜枝岐川ひえまたに通ずる片品川線即ち奧利根川線即ち奧利根川東線

があつて、その左支は

(七) 清水峠を越えて越後魚野川に通ずる奧利根川西線

を成し、この第七線と第八の碓氷川を越えて信濃川上流に達する中山道幹線とは越後に出で日本海岸に沿ひ北進する幹支兩線となつてゐる。

前稿には此等の諸線の中で碓氷幹線から東進する武田氏の軍事行動に對して、第七の奧利根兩線の出口に當る箕輪城の位置が戰略上頗る重要な城塞であつたことを述べた。その第六は海拔一七六二〇米の尾瀬(三平)峠を越えてその北の會津山中の幽谷に入るもので、交通線として殆んど指擧する價値のないものである。

之に比すれば第五の黒川男鹿川線は分水界の山王峠海拔九〇六米に過ぎざれば、會津との交通線として多少の意義を有し、上杉景勝は天正十八年此の峠を越して前田利家と共に會津に入つて改封

の所領を受け取つたことがあり、又た慶長五年に徳川家康から難題を持ちかけて挑戦せられた時にも、直江山城守兼續が二萬の兵を率ひてこの線に沿ひ南下して、搦手から宇都宮の方面を衝かんとして高原まで出陣したことがあつた。

然れども奥羽交通の最も重要なる線路は鬼怒川その他の諸河道の竝流する中央凹地帯にして(四)(三)(二)の諸谷は何れもその北端は餘り著しからぬ分水界により磐城の側の阿武隈川幹流又は支流に連續してゐる。蓋し入溝山地の西邊は地溝狀の斷層線に界し、主として火山噴出物より成つた所の第三紀層及び洪積層が瀬戸内海に比較すべき海面を埋没して現狀を生じたものであるから一般に波狀の丘陵から成つた地形である。河間平地を北進する軍には古河小山栃木壬生結城等の諸邑は何れも足溜りに重要なるは前稿に述べた所から明かであるが、特に戰略上に樞要の位置を占めるのは宇都宮にして、延元の頃奥羽勤王の軍が南下するに當つて、常に此に會して鎌倉の動靜を察してから出發したといふのは偶然でない。

是よりも東の烏山大宮太田の諸邑は同じく南北に走る溪谷の南端の出口を支配する位置を占めてゐるので戰略上に重要なる譯である。

## 一七

今の東北本線に沿ひ北進する南軍の奥羽に據つた北軍と衝突すべき地勢は諸川の分水界に當る國境地方にして白河關はこの線上に於いて最も防禦に便なる場處である。而してこの交通路には凹地の西側に在る黒磯から白河町の西に出る現在の國道と鐵道と鐵道と芦野寄居白坂を經る舊道と最も

東の伊王野から追分を経て白河關址と稱する旗宿に通ずる古關道との四線がある。その中の白河關址と稱する處は恐らくは奈良平安兩朝の奥羽經略に當つて置いたものではなくて、平安朝末期に至り藤原秀衡一門が鎮守府將軍となつて奥羽一圓を占有した頃にその南境の關門として設けたものらしい。従つて賴朝が幕府を鎌倉に開き之を征服せんと試むるに當つて此の南北勢力の分界線上で一戰が起るべく期待される。

秀衡は義經を納れて之を優遇し何時でも奥州十八萬騎の兵力を以て鎌倉勢に當るを辭せなうたが、賴朝も亦たその存生中には容易に手を下すことを敢てせなうたが、その歿後に闇愚なる泰衡を威嚇して秀衡の遺言に背いて義經を殺させた後に北征の大軍を起した。その行動の經過を吾妻鏡(卷九)に據つて追跡するに、文治五年(一一八九年)七月十七日部署を定め三道から竝進する作戰に出た。

その右翼軍は千葉介常胤八田知家等で各一族等と常陸下總兩國の兵士等とを率ひて宇大行方うたを経て磐城岩崎を廻り阿武隈河の湊を渡り、主力に會合せんとする東海道軍で、濱街道を北進するものである。

左翼軍は比企能員宇佐美實政等で上野國高山小林大胡左貫等の住人を催して越後國から出羽國念種(鼠ヶ關)に出でる今の羽越南線の海岸線に沿ひ出羽國に亂入せんとするものである。

主力軍即ち大手は賴朝が自ら之を指揮し、畠山重忠を先陣とし、之に加藤景廉葛西清重等を副へ、十九日鎌倉を發し、二十五日宇都宮に着き、二十六日宇都宮を發し、二十八日新渡戸驛に着き、二

十九日白河關を越えた。然るに兩軍の衝突は此處では起らずして、頼朝は容易に奥州第一關を通過した。

二十九日丁亥、越白河關給、關明神御奉幣、此間召景孝、當時初秋也、能因法師古風、不<sub>レ</sub>思出<sub>レ</sub>哉之

由、被<sub>レ</sub>仰出<sub>レ</sub>景季扣<sub>レ</sub>馬、詠一首、

秋風ニ草木ノ露ヲ拂セテ君ガ越レハ關守モ無シ

この吾妻鏡の一節は豫期に反して無抵抗のうちに形勝の地を占領したことを語るもので、最早北兵の能く爲すことなきことはこの通關により明かとなり、鎌倉勢の意氣は既に泰衡を呑んでゐるのが躍如として言外に現はれてゐる。

泰衡の此處を抛棄した作戦計畫が如何なる意圖に出でたかは戦敗者の記録が全く傳らぬから明かではないが、その失當は後に上杉氏が會津に據つて徳川氏と雄を争はんとした時及び戊辰役に奥羽諸侯の官軍に對抗した時の事情から推斷し得る。

慶長五年六月六日徳川家康の在阪諸將を會して會津征伐の部署を定めたの左の如し。

白河口 徳川家康、秀忠及び關西諸將

仙道口 佐竹義宣

信夫口 伊達政宗

米澤口 最上義光及び仙北諸將

津川口 前田利長、堀秀治、村上義明、溝口秀勝等

にして、その仙道口といふは久慈川を溯り岩代東白河郡棚倉に達する八溝山塊の東側に沿ふた奥州仙道線にして、津川口は越後東蒲原郡津川から阿賀川溪谷に沿ひ東南に向ひ會津盆地に出る岩代の西方に向つた唯一の通路である。

上杉景勝の之に對する作戰の計畫は、越後方面はその舊領なれば土豪の蜂起により新封諸侯を牽制し、東南は竊かに佐竹義宣に結び、北及び東の最上伊達兩氏の背面を衝かんとするものを防ぎつゝ、主力を白河附近に出して高原に出た直江兼續を右翼とし佐竹氏の手兵及び浮浪約七萬を左翼として、之と犄角して徳川氏の主力に當らんとした。

會津から東南への交通線は郡山に至る今の磐越西線の南に猪苗代湖南の三森峠、諏訪峠、勢至堂峠及び鶴沼川を溯つて那須火山の北腹鶴沼峠を越えて白河に達するものがある。その中勢至堂峠（海拔七四一米）が最も低く、須賀川の西約十五料に在る長沼は須賀川矢吹白河に對して扇の要の如き樞要の地點を占めてゐる。

日本戦史關原役に據るに景勝の此等の方面の守備は小峰城（今の白河）に安田能元、白石城に甘粕景繼、福島城に岩井信能大石綱元、森山城に本庄繁長等を配置してゐたが、その逆撃を決心するや自ら出で、白河方面の地形を偵察する爲めに勢至堂峠を踰え長沼白河を過ぎ二所關に至り、鶴生羽太を經て歸りて諸士を會し、白河の南に革籠原あり、地勢廣豁大兵を誘致すべし、吾輕兵を越堀萱野の間に出し、戦を挑み佯り敗れ退かば敵必ず追躡せん、其原頭に至るを俟ち銳兵之を衝き前鋒を破らば、家康必ず麾下を以て之を救はん、其時我兵一は左より一は右より掩撃して之を殲さん、戦若

し利あらずば全く白河に死せんと決心を語つたといふ。

戦史には此の右と左とに割注にて景勝の麾下關山の背後より進むものと兼續の兵南山口より出で下野高原に屯するものとである附加へてゐるが、今按ずるに高原に在る兼續が此處に來會して南軍の左翼を衝くには餘り距離が遠い様である。我々の革籠原から旗宿(古關址)までの地形を目睹した所では、到る處丘阜起伏し林薄叢生し且つ沼澤にも乏しくないから、小峰城を中心としてその左右數軒の地點に集合した兵力を擧げて一時に土地不案内の客兵に對して逆襲に轉せんとしたと解する方が妥當ならんと信ずる。

景勝は兼續に兵一萬を率ゐて南山口から下野に出で高原に屯せしめた外に、本莊繁長及び其子義勝をして八千餘を率ゐる鶴生鷹助に屯せしめ、安田能元島津昔忠をして白河に屯し、市川房綱、山浦景國をして關山の下に屯せしめ、景勝は長沼に營せんとしたといへば、右翼は本莊勢左翼は市川勢を意味したものと解してよいらしい。

但し此の一戦に於いて好果を得たとせば、家康の首を擧ぐるに至らずとも、佐竹義宣及びその部下の浪人總勢七萬と稱するものが、南軍の右側面を衝き、直江兼續の一手は遙に西南からその背面の退却線を遮斷することも可能であつたから、南軍には殆んど死地に陥るべき危険があつた譯である。然るに家康の北伐は陽動に過ぎずして、宇都宮に結城秀康を抑へに置いて旆を返して關ヶ原の決戦を急いだから、此の計畫は實現されずに了つた。然れども戊辰役に於ける會津藩を主力とした北軍の行動は略ぼ當時の計畫を套襲したもので、會津勢は勢至堂から進出して北進する官軍は白河城

を中心とする戦場に於いて頗る苦戦に陥り、その西北の村落から奇襲するものを掃蕩してからこの樞要の地點を確保し得た事實がある。

白河往昔記には義經が陸奥勢を引き連れて關東に上る時に佐藤莊司が此の關まで送り、繼信忠信兄弟と別れたといひ、古關址の南の追分に義經の休息して母衣を掛けた槻楓といふ名木が今もあるといふ。此の如く義經の地勢を熟知した處であつたとせば、若し義經を主將とした奥羽勢と頼朝の北伐軍とが雌雄を決したならば此の邊で或は決戦したかも知れぬのである。然るに泰衡に先見の明なくして自ら墓穴を掘る如き卑怯なる措置を取り奥州武士の此處で決戦せなんだのは甚だ物足らぬ感がある。

奥羽地方の境界線に在る勿來と鼠ヶ關兩關に於いて同様であつたらしく、常胤能員等も亦た吹聴に値する激戦を経験せずには北進したらしく、吾妻鑑に注意すべき記載がない。

## 一八

白河以北の凹地の續きは阿武隈川溪谷なるが、白河より約三十料の東北須賀川の北の安積郡笹川と須賀川の西南三料に在る岩瀬郡稻村とは室町幕府時代の奥州の押へとして派遣した足利滿兼の兩弟にして持氏の叔父に當る滿貞滿直の駐在所とした處である。共に御所と稱し、笹川（今の永盛町笹川）驛西の阿武隈川に面した丘腹に笹川神社が在つて、土俗今もその祭神を御所様と言ひ傳へてゐる。笹川の位置は安積平地即ち郡山盆地の南に在つて阿武隈川その丘足を北流し右岸も亦た阿武隈高原西麓の第三紀層丘陵の迫る處にして、雄大高峻の地勢には非ざるも、鎌倉幕府の岩磐兩國を扼



制する目的で設けた前進地點としては相當の意義は認められる。

賴朝北伐の時には此の平地も更に北に在る信夫平地も無抵抗で行進し、半田山の東腹に當る今の藤田驛の北で、初めて錦戸國衡の厚樫山の防禦陣地に到達した。

この戰鬪の次第は吾妻鑑同卷八月七日の條に見えて、泰衡二品發向し給ふと聞き阿津賀志山に於いて城壁を築き要害を固め、國見宿と彼の山との中間に俄かに口五丈の堀を構え、逢隈の河流を堰き入れて柵を設け、異母兄西木戸太郎國衡を以て大將軍とし、金剛別當秀綱其子下須房太郎秀方以下二萬騎の軍兵を著け、凡そ山内三里の間に健士充満し、之に加ふるに河田郡に於ても又た城郭を構へ、名取廣瀬兩河には大繩柵を引き、泰衡は國分原鞭楯に陣し、亦た栗原三迫、黒岩口、一野邊にも若九郎大夫、余平太以下郎従を以て大將軍として數千の勇士を差し置き、又た河原太郎行文、秋田三郎致文を遣り出羽國を警固したといふ。

厚樫山は藤田驛東北に聳出した山で、その南の山腹に今も二重壕の遺跡と想はれるものが殘存し、山下に大木戸といふ字の村落があつて、阿武隈河水はこの平地の一部に堰き止めて入れたものと見える。この山の東北に貝田の村落があつて、岩代陸奥國界の山地に狹隘なる通路を成してゐる。

鎌倉勢の攻撃は八月卯刻に始まり、金剛別當の率ゐた數千騎の厚樫山前の陣地に對して重忠朝光等の筋合せがあつて、秀綱大軍に壓迫されて退いて大木戸に入り、佐藤庄司も亦た阿武隈河水を引き入れた湟に據り討手を防ぎ常陸入道念西の諸子に討ち取られたが、此の壘壘を陥ることは出來ず夜に入り、翌九日早天より再び厚樫山を力攻したが同じく北軍の爲めに喰ひ止められ、十日に至

り前夜小山朝光等七人の勇士の藤田宿から會津の方に鳥取越の險を攀ちて大木戸の上の國衡後陣の山に登つた奇襲が功を奏し、搦手から大軍が襲來したと誤解して潰走するに及び初めて此の陣地を陥れた。

此の戦闘の經過を見るに兩軍共に力戦したには相違なきも、小山朝光の功名を除いては戰略的に面白い行動はなく、殊に奥州勢には攻勢防禦に出る決心が全く缺けて佐藤庄司一家、金剛別當父子等を除いては手を束ねて鎌倉勢の攻撃を待つたものゝ如く、醜態を極めたのである。従つて主將泰衡部將國衡等を始めとして上下共に踏止つて險要に據り頼勢を盛り返さんとする勇氣なく、鎌倉勢は破竹の勢で北進して十二日夕多賀國府に著き、常胤等も亦た逢隈湊を渡つて來會し、二十二日には平泉館の燒跡に著き、奥羽一圓は一月の中に平定した。

## 和歌山縣田邊附近第三紀層の層序

(圖版第四版付)

竹 山 俊 雄

### 一 緒 言

茲に第三紀層と云ふのは二十萬分の一那智圖幅地質説明書の第三紀層を指すので、該層は田邊町を中心に略々半圓形を成して露出してゐる。那智圖幅には此の第三紀層地の北東に第三紀古層と時代未詳の中生層との境界がある如くかゝれて居るが、之を認め得なかつた。この第三紀古層と中生